



あねきゅん♥
お姉様はお嬢様な三姉妹！

巽 飛呂彦

illustration ©みついまな

美少女文庫
FRANCE & SHOIN

あねいっぱいの花園へ

「るりか瑠璃香」

「はい。あまかすひろゆき」

甘粕ひろゆきが呼ぶと、花小路はなこうじ瑠璃香るりかの甘く、みずみずしい声か耳にかえってくる。いつものツンとした瑠璃香の顔が、今はほんのりとピンクに染まっている。そのはにかんだ表情がびっくりするくらいかわいくて、一歳上の姉とは思えないほどドキッとするとする。

たつぷりと陽光が射しこむ広々としたベッドルーム。

いつも以上に瑠璃香を魅力的に見せているのは、そのコスチュームにもあった。瑠璃香が得意なテニスのウェア。

インターハイ準優勝という実力は、マスコミからも注目されている。

十七歳にして高校テニス界のプリンセス。そんな瑠璃香が、今ひろゆきと同じベッドにいる。

白のテニスウェアはノースリーブで、肩紐はキャミソールのように細い。その分、Fカップに尖った瑠璃香のバストがたつぷりと露出するタイプ。

ワンピースになったスカートの裾も股間ギリギリで、瑠璃香の長い脚をいっぱいに見せつけている。手にはラケットが握られていた。

「こんな格好させるなんて、すごく恥ずかしいのに……」

瑠璃香がひろゆきを上目づかいで見る。

恥ずかしいのに、ひろゆきの言いつけとあつては拒めない。そんな、怒ったような、でも甘えるような、瑠璃香の視線がひろゆきに突き刺さる。

「瑠璃香だけじゃなくてさ、こっちも見ろよ、ひろゆき」

「ひろゆきさん。わたしも、見てください」

だがベッドの上を彩るのは瑠璃香だけではない。

美しい上の姉の甘い声が、真っ白いシーツの海の上に響く。

瑠璃香同様、いずれも得意なスポーツを持ち、活躍するアスリートでもある。

長女の花小路沙希子は新体操。

次女の真希はビーチバレー。

その彼女たちが今、それぞれのスポーツコスチューム姿でベッドの上に横たわり、甘粕ひろゆきを誘惑している。

「いかがでしょうか」

沙希子は赤のレオタード。

さらに色鮮やかな赤のリボンが、身体にからみついている。リボンの片方の端にはスティックが。新体操のリボン競技で使うものだ。

「ほら、ひろゆき」

真希はビーチバレーのウェア。

セパレートの水着のように見える。ボトムは黒のハイレグ、Tに近いハイバック。それに、スポーツブラっぽい青のトップ。

「ちよっとひろゆき！ 瑠璃香のこと、無視するわけ？」

つい上の姉たちに目がいってしまいうひろゆきを、瑠璃香がにらむ。いつものツンとした表情が戻ってきていて、ひろゆきをあわてさせる。

「いや、そんなわけじゃ……」

「いいじゃないか。あたしだって、まだひろゆきのこと、あきらめたわけじゃないんだからな。ひろゆきがいい、って言えば、どうなるかわからないぞ」

そう言ってイタズラっぽく笑うのは次姉の真希だ。ひろゆきの首を抱いて、自分の

胸へ弟の顔を押しつける。

「そうですね、瑠璃香ちゃん。わたしにだってひろゆきさんをかわいがる権利はあるんですよ。だってひろゆきさんの、姉なんですよ」

今度は沙希子までが、その豊満すぎる胸をひろゆきの顔へと押しつけた。

「う、ぐう……」

真希の綺麗なお椀型を描いた弾力のあるバストと、沙希子のプリンのようにやわらかいHカップバスト。そのふたつのバスト×2＝四つの乳房の山に挟まれ、押しつけられてひろゆきはうめく。

「もう！ お姉さま方はひろゆきから離れて！ ひろゆきは瑠璃香だけのものなんだから！」

強引にひろゆきを奪い取る瑠璃香。いきなり引っ張られ、そのうえ乱暴に抱きしめられて目をまわすひろゆき。

「ううう」

だが姉たちもまだまだあきらめたりはしない。

「ひろゆきさん、このレオタード、とっても薄いんです。ちょっと引っ張ると、ストッキングみたいに破れてしまいそう」

沙希子はそう言うと、大きく脚を開いてみせる。

赤い極薄のレオタードは沙希子のグラマーな身体にぴっちり張りついていた。九十五センチ、Hカップのバストはたわわすぎるほどに実っている。

無理矢理引き伸ばされた布地はさらに薄くなり、沙希子の乳首までをプッチリと浮かびあがらせた。

二十四歳の熟れかけた肢体は、沙希子の身体をさらに魅力的に見せる。

わずかにふくらした下腹の下、食いこんだ股間がひろゆきを誘う。肉裂の形までくつきりと浮きださせたレオタードは、むろん下になにもつけていない。

腰骨まで切れこんだハイレグが、沙希子のムツと豊かな恥丘を際立たせ、左右からは恥毛がはみでているのが見えた。

ゴクッ……。つい喉が鳴るひろゆき。

「いい、んですか、沙希子さん。ほんとに」

ひろゆきがためらっていると、沙希子がその手を取って自分のバストへ押しつけた。「すごく、熱くなっているんです。乳首も痛いくらい硬くなって。早く、引き裂いてください。そして、このリボンで……」

沙希子の手に握られているリボン。

今リボンは、沙希子の身体のあちこちを巻いていた。

バストの上と下を通り、腰を巻き、股間からまた沙希子のステイックへ戻る。

ステイックを引くと、股間のリボンが超ハイレグ極薄の布地ごと、沙希子の肉裂までも食いこんでいく。ハイレグの左右から、盛大に恥毛がはみだした。

「すごい、いっぱい出てる」

「ああ、恥ずかしいです……」

沙希子の胸のリボンまでがきつく締まって、上下から絞りあげられたHカップバストがはち切れそうにふくらむ。

「これ……!」

「破って。裂いて! ください」

言われるのと同時に、ひろゆきの手が沙希子のバストをつかんだ。片方だけでも両手にもあまる大きさだ。そのまま乳房ごと引っ張る。

「ハアア……ウ!」

乳房が縦に伸び、引っ張りつづけるとレオタードだけがピリピリと裂けた。沙希子の裸の乳房がブルンッ、とすっかり露出する。

「沙希子さ……う!」

ひろゆきが言うより早く、沙希子はその頭を抱いて胸に押しつける。

九十五センチHカップの乳房に顔が埋まる。できたてのプリンのに海に溺れるような、やわらかすぎて温かい、そんな感触にひろゆきはうめき声をあげた。